

四年七月)

住田智見師、教行信證拜讀の沿革及研究の用意に就て

無盡燈二一七號(大正三年四月)

(大正十一年十一月十七日稿)

## 東本願寺所藏教行 信證延書のこゝ

日下 無倫

一

予はさきに本誌第三卷第二號(昨年四月發行)に於て「教行信證延書古寫本の研究」を題する未定稿をかかけ、大方の叱正を仰いだのであるが、今こゝなりては多少あき足らない所もあり、補綴したい箇所もあるから「延書」に關する研究は、いづれ近い中に再び項を改めて發表したく思つてゐる。そのなか、現存古寫本中最古に屬する稀品として、東本願寺内事局所藏の一本を特に注意しておいたが、今は是の一本に關してのみ多少の修正補足を施したのである。そして原稿を切

の當日に際してあわたしくペンを取つた。

二

東本願寺本は合計十九帖の粘葉綴から成立つてゐて各帖の標紙には、それぞれ外題文字(題簽)を、その左隅に「釋源覺」の三文字が、本文と同一筆にてかゝれてある。そうして信卷三末中には左の奥書がある。

貞和二歲丙戌二月二十八日時正  
第四日

右文中の時正は春秋二季彼岸の中日の事で、今は二月とあるから春彼岸であることは申すまでもない。「二月二十八日時正」があるから、これより推測するに、貞和二の春季彼岸の中日は、正しく二月二十五日であつて、その第四日即ち二十八日の意味である。前號に於ては「時まさ」の意味に誤解して二十五日から起筆したものと早合點して書いたが、今はさうでないことを改めて茲に訂正しておく。

三

本書が南北朝初期貞和二年(紀元二〇〇六)の書寫にかゝる真本なる事は、紙質墨書に徴して歴然たるもので、今更論するまでもないが、しかし、此れが果して源

覺なるものゝ筆に成れる眞蹟と言ひ得るであらうか。

もこより標紙の左隅に書く所の「釋源覺」の文字を、本文の筆蹟を、この二者を比較すれば同一筆なる事は殆ど疑ふべき餘地がない。しかし同一筆だからして必ずしも源覺の筆に限らないのである。例へば、阪東御眞本教行信證の證卷および眞佛土卷の外題の左方に、「釋蓮位」の文字があるからして、それが直に蓮位の筆とは考へられまい。これは本文も外題の「釋蓮位」の文字までも、共に第三者たる親鸞聖人が、自ら書き給ふて門弟蓮位に附屬せしめたのである。これは親鸞聖人の筆蹟からいふと最も明白なことである。たゞに親鸞のみに限らず、眞宗の原始教團に於ても、覺如、存覺、兩師を初めとして、その他の列祖が、その門弟に、それぞれ其門弟の姓名までもも本文にかきそへて與へ給うた例が實に數々ある。最近、河州圓德寺顯證の影寫したる所の「往生要集延書」十二卷本（江州栗太郡安養寺村安養寺所傳）を見ることを得たのであるが、各卷標紙の右隅に「釋淨性」の文字があり、しかも本文と同一筆である。その奥書に、

「此抄者、江州栗本郡安養寺釋淨性依所望書寫畢、  
千時享德三年甲戌卯月十七日」

とあるから、寺傳の示すが如く、蓮如上人が御年四十歳の時に門徒淨性に書寫傳授せられたものなることは明らかである。かういふ形式が當時に於て一般に行はれてゐたをすれば、或は源覺なるものの筆寫ではなくて、却て他から附與せられたものではなからうか。

然らば誰れによつて附與せられたのであり、また、附與せられた源覺その人は何者であつたであらうか。

#### 四

今是を推斷するの前に、先以て本書の傳來を考へねばならぬ。從來本書が大和國北葛城郡箬尾教行寺の所傳なることは、その箱書の署記によつて知るところを得るのであるが、今回、能淨院大谷瑩誠師の特別なる厚意によりて、計らずも「延寶六年教行寺第六世宣誓の由緒書」に接するを得た。今全文を示さば左の如くである

教行證一部延寫十九冊者釋源覺後號之眞筆。而本願寺歷代相傳至蓮如上人矣。蓮如上人以此書傳授教行寺蓮藝大僧都實如上人爲的傳相承之家寶也。以

來、證如上人御年齡六歲時、圓如上人御遷化。十歲時實如上人御遷化故、證如上人御幼稚ニ而守祖跡云云。前住上人召教行寺曰證如上人成長時委悉可傳授教行證之旨有御遺言云云故。以後奉勤此役權ノ相承人ト云其時此書尙爲寶鑑也。顯如上人教如上人御直授教行證之時、證誓教行寺三勤傍人口傳之證役也。其後以此書奉納置本寺寶藏甚恐寶書有失却故云云。副本慙重雖殘留之一亂之後既紛失故。拜借彼奉納之存覺直筆正本而書寫之也。教行寺住持一人披拜之、外人不可開卷之旨、常如上人制定之畢。

延寶六年戊午季春中旬 教行寺六世住職宣誓

(花押)

さて上述の由緒書をここまで信用してよいか、その史的價值如何の問題になるこ、予は少しく躊躇せざるを得ないが、その文中に「教行證一部延寫十九冊者釋源覺號後存覺之眞筆」こあり、また「存覺直筆正本」こもある邊から見れば、是れ明らかに、源覺は存覺師の幼名であり、本書が、こりも直さず存覺師の眞筆本こいふ

ここに決せらるゝわけであるが、今少しく史眼を開いて考ふれば、ごうも此の説には賛成しかねる。何こなれば、源覺が存師の幼名であるこいふこは史上初耳なこで、他の何れの存覺史料にも見えてないし、殊に若しかりに、さうだこすれば、貞和二年の本書書寫の當時に於て、存師は已に五十六歳の老壽なるのにも拘らず、わさゝこに幼名を擔き出す必要もなからう。疑ふべきは實に此點に存する。尙また、康永二歲乘智の所望により、初めて和字に延譯せられたる「存覺師延書」こ、本書を比較對照すれば、その體裁及び内容に於て兩者著しき相違の存するこも、また以て存師と源覺との別人なる一證左である。その他、本書の筆蹟の點から見ても、存覺師の眞蹟に似通ふたる點の稀薄なのに驚く。かくの如く、種々なる點に於て愚考をめぐらしてくるこ、その結論たるや、やがて本書は存覺師の眞筆でもなければ、また源覺(存覺師の幼名こせず、別人こ解す)の筆寫でもないこに歸着する。實に他の何人かによつて筆寫せられ、そして源覺へ附屬傳授せしめたものであらう。

## 五

いま本書がたゞへ存覺師の筆でないにしても（或は覺師筆と思はしむる節がないでもないが今は言はず）

古來、本書が御本書傳授の用に供せられたことは疑ふまでもないことで、これ實に本典傳授史上に於ける重要な聖典であつたのである。御本書傳授に、附屬傳授と、讀み方傳授の二つあるが、古來多く傳授と稱するのは、書物そのものゝ譲與といふよりも、御本書の讀み方を教へたることの謂である。故に「御延書」といふものは、一面に於て漢語體の文章を讀み得ない所の愚痴驢昧の民のために、わかり易く和文に延譯したものだとも言ひ得るが、他面に於ては正しく御本書傳授の用に供するためであつたのである。

由來、御延書なることの原始的意義は、必ずや親鸞聖人の御眞本を以て底本とし、これより直に和字に延譯さるゝものであつて、まして曖昧摸糊たる惡底本を用ゐてさるゝべきでない。選擇集延書の奥書に、「曆應四歲辛巳五月十四日以聖人御點之正本」にあるが如く、また文類聚鈔延書の奥書に、「曆應三歲四月二十三日本

願寺聖人、以被染御筆眞名正本云云」も言ふが如く、

一度聖人自筆の眞名の正本より和字に延書されたそのまゝが、次第に師資展轉相承し、傳寫の度を重ねるに至るのである。今の貞和二年延書本も、恐らく聖人自筆の御眞本よりの延書若しくはその傳寫に外ならぬもので、「由緒書」にあるが如く、その相傳に關しては、蓮如上人、蓮藝大僧都、證如上人、顯如上人、教如上人、證誓等の次第相承を明らかにしてゐるが「貞和本」そのものゝ附屬傳授のみならず、本書によりて、却て御本書の讀法の傳授をしはゞ行はしめたものである。本書相傳者の蓮藝は蓮如上人第八男で、兼琇といひ箸尾教行寺の初祖である。大永三年閏三月二十八日辛、四十二歳であつた。教行寺第二世は實誓（兼詮）といひ第三世は證誓（佐榮）といふた。第四世顯誓（柳勝院壽詮）第五世教誓（信量院壽仙）を経て、由緒書著者の第六世宣誓（從海）に至つたのである。第二、第三世の人は、盛んに御本書の傳授を行ふたものらしい。「由緒書」の末尾に添加せる古記録には、實誓、證誓の御本書傳授を記して曰く。

一、天文十五丙午年三月二日ヨリ於本寺御堂讀教行證也。

教行寺實誓 弟子左衛門督殿 御新發意

坂東横曾福 報 恩 寺

御堂衆賢勝 治部卿 光德寺乘順

右實誓正筆有之

一、於大阪本寺證誓讀六要鈔トノ覺書自筆雖有之年號無之故不記此。

天文十五年いへば證如上人三十一歳の時であるが、此の傳授記事が不幸にも「天文日記」に漏れてゐる點に於て、此の記事は最も史的貴重なものである。かうした御本書傳授に依用せられたものゝ重なるものは、申すまでもなく、この貞和延書本であつたらう。

六

御本書傳授については餘華に互るから喋々するに及ばぬが、要するに、貞和二年本の筆者が誰れであるかはその筆蹟の史的考證を待たねば知ることが得ないが、源覺即ち存覺にあらざるをすれば、所傳授者なる源覺の傳記を明らかにせねばならない。山田文昭氏所藏の

古寫本教行信證の奥書に、「文安六年巳巳五月六日、越前國メシトリ源通之」ありて、源通の名を出だし、越中城端別院所藏の六要鈔に、常樂寺空覺の寛正五載の奥書が附せられてあるが、その中に「雖然思彼源通源通懇志之由來」あつて此亦源通の名をいだす。これらの源通は、同時代といひ、恐らく同一人であらう。而して、何れも名字の冠字に源の字がある以上、今の源覺は此の源通なるものゝ何らかの關係を有するものにあらざるなきか。しかしこれも雲をつかむやうな覺束なき空想に過ぎぬもので、史的根據のあつたものでない。要すに源覺に關しては何等の史料を得ることができないのである。不知は不知のまゝ、おめすおくせず茲に曝露して、切に大方の御教示を仰いでおく。(完)